

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12324

研究課題名(和文) 接続された孤独：十九世紀アメリカ文学におけるモダンティ

研究課題名(英文) Networked Solitude: Modernity in Nineteenth-Century American Literature

研究代表者

古井 義昭 (FURUI, Yoshiaki)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：30815634

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を通じて、十九世紀アメリカ文学における孤独(solitude)の概念を、十九世紀中葉に起きたコミュニケーション革命という歴史的背景を参照しながら検討した。本研究はメディアによってもたらされる「接続」ではなく、その対をなす「孤独」という概念に着目し、「接続の時代における孤独」という逆説をあぶり出すことで、従来のアメリカ文学研究において中心的なテーマであり続けた「個人主義」という概念の再考を迫った。十九世紀アメリカ文学に「ネットワーク化された個人」を見出すことにより、個人主義という概念の発展的な修正を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

孤独という概念は、誰もが生きる上で経験する普遍的体験であるが、本研究はこの普遍的と考えられがちな概念を「十九世紀アメリカ文学」という地理・時間・表現形態に限定したうえで考察を行った。本研究から導きだされたのは、孤独は時代や文化背景によって決定される環境依存的なものであるという点であると同時に、十九世紀アメリカで生まれた孤独は、現代のグローバル世界、ネットワーク社会において経験される孤独と連続性をなしているという点であった。その点から、本研究は単に十九世紀アメリカ文学研究という専門領域に閉ざされるものではなく、より広く一般の興味関心に訴えかけるものがあると言える。

研究成果の概要(英文)：Through this study, I examined the concept of solitude in nineteenth-century American literature, by referencing the historical background of the communication revolution that occurred in the mid-nineteenth century. This study focused not on the "connection" brought about by the media, but on its opposite, the concept of "solitude." By interrogating the paradox of solitude in the age of connectivity, I reconsidered the concept of "individualism," a central theme in the criticism of nineteenth-century American literature. By finding the "networked individual" in American literature, I was able to make a revision of the concept of individualism.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 孤独 個人主義 ネットワーク 情動理論 十九世紀アメリカ文学

1. 研究開始当初の背景

本研究計画は、2015年12月に米国エモリー大学に提出した博士論文を発展・拡張してゆくことを目的として構想された。研究計画を遂行する際、以下の二点を目標とした。まず第一に、孤独(solitude)の概念の理論的洗練化を目指すこと。本研究は孤独と区別して、寂しさ(loneliness)という感情を対置するが、感情を論じる上では近年学術的関心が高まっている情動理論(affect theory)が有用であり、最新の研究動向に照らしながら概念分析を行ってゆくことが大きな目的であった。第二に、十九世紀中葉に生まれた孤独の概念の新規性を確認するため、当時のアメリカ文学を同時代のコミュニケーション・メディアと関連づけて考察すること。上記の二つの目標を達成することで、博士論文を発展的に改稿し英語単著として刊行し、さらにはその先に「寂しさ」という感情について研究を深めていけると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、十九世紀アメリカ文学に見られる「孤独(solitude)」を、当時の歴史的 背景に照らし合わせながら定義し、その価値を検討することにあつた。孤独という主題は、十九世紀アメリカ文学を代表するあらゆる作家たちが様々な形で取り組んでいたものである。しかし、これまでアメリカ文学における孤独の概念を体系的に論じた研究はなかった。もちろん、単発の論文として個々の文学作品における孤独を扱ったものはいくつかある。しかし、アメリカ文学における孤独の概念の変容を包括的・歴史的に解明しようとするものは、本研究が初のものである。また、「孤独」と類似した主題として、「個人主義」という問題がこれまでアメリカ文学研究では頻りに論じられてきた。しかし、本研究は「孤独」という概念を、「個人主義(individualism)」や「寂しさ(loneliness)」などといった隣接する諸概念と区別化し、概念の明確化を図ることを目的とした。

本研究が特に重要視した目的は、すぐれてアメリカ的な価値体系である個人主義と孤独はどう違うのか、という点を考究することにあつた。十九世紀アメリカ文学には孤独という主題が豊富であるにもかかわらず、その点に関する研究が極めて少ないことは先述した通りである。これはなぜかと考えると、一つの理由として、孤独と個人主義が混同されて理解されてきたという批評史的経緯が考えられる。アメリカ文学研究においては、Gillian Brown の *Domestic Individualism* (1990) や Wai-Chee Dimock の *Empire for Liberty: Melville and the Poetics of Individualism* (1989) など、個人主義をタイトルに冠した重要研究書が多い。「個人主義」とは主に政治的理念、思想を指すものであるが、本研究は「孤独」を個人が「寂しさ」というネガティブな感情に抵抗するための方途と捉えた。したがって、「ひとりである」という状態を「個人主義」ではなく「孤独」として理解することは、その状態のより個人的・感情的な側面に光を当てる作業となる。「孤独」に焦点を当てることにより、「個人主義」偏重型の従来のアメリカ文学研究に一石を投じることを大きな目的として本研究は遂行された。

3. 研究の方法

(1) コミュニケーション革命と孤独の関係性

本研究の主眼は、「孤独」をキーワードに 19 世紀中葉のアメリカ文学を読み解くものであったが、その際に注目したのは、19 世紀中葉に起きた「コミュニケーション革命」という歴史的背景である。Paul Starr, Richard R. John, David M. Henkin から歴史学者が明らかにしたように、郵便システム、交通、電信などのコミュニケーション・メディア、技術の発達により、19 世紀中葉のアメリカは未曾有のメディア環境を享受し、個人同士は接続され、国家の統合へと進んでいった。しかし本研究が着目したのは、メディアによってもたらされる「接続」ではなく、その対をなす「孤独」という概念である。この問題意識を追求すべく、本研究は文学研究を志向しながらも、歴史学(上記の Starr, John, Henkin) 思想(特に Jacques Derrida) コミュニケーション理論(特に Marshal McLuhan, Walter Ong, Friedrich Kittler, John Durham Peters) の知見を積極的に取り入れることで、文学研究の枠に収まらない学際的な研究を目指した。

(2) 脱構築と新歴史主義の融合

本研究は、脱構築的読解と新歴史主義の融合を目指すものでもあった。フランスの思想家ジャック・デリダを始祖とする脱構築批評は、テキスト「のみ」を読解するというその特異性のため、「非歴史的」と研究者たちに考えられてきた。90 年代から現在まで影響力を振るう新歴史主義の批評家は、脱構築的読解をそのようにレッテルづけし、80 年代の産物として退けてきたが、その二つは矛盾しておらず、むしろ脱構築的読解と歴史的手法を組み合わせることで、これまでにない、新しい文学研究の地平が切り開けるものと考えた。本研究は新歴史主義的手法を取りつつ(つまり、歴史的コンテクストに注意を払い、新聞・雑誌記事などのアーカイブ調査をする)、脱構築的な、テキストの細部から全体をあぶりだすような読解を目指した。言い換えれば、歴史的枠組みを設定しつつ、その枠組みのなかで、テキストの細部を読解するという二重構造を取ることとなった。

(3) 「寂しさ」に対する情動理論からのアプローチ

寂しさという感情を考察するにあたり、文学研究における「情動的転回 (affective turn)」に関する研究を網羅的に精査した。過去 10 年以上の間に、アメリカ文学におけるさまざまな感情のモードを検討すべく、情動理論を利用した研究が続々と発表されてきた。Sianne Ngai の *Ugly Feelings* (2005) から Paul Huhns の *American Terror* (2015 年)、Adam Frank の *Transference Poetics* (2015 年) に至るまで、様々な研究がアメリカ文学作品の中で感情がどのような形で現れているのかを明らかにしてきた。これらの研究は、これまで理性に劣るものとして見過ごされてきた感情を、批判的な分析の対象として再定位ことに成功したといえる。これらの研究で得られた知見をもとに、主にメルヴィル作品を対象に読解を行うことで、いかに寂しさという感情が文学言語によって表象されるのかという点について考察を行った。

4. 研究成果

本研究計画を通じて国内外の学会で精力的に研究発表を行い、そこで得られたフィードバックを論文執筆に活用することで、当初の想定よりもはるかに充実した研究成果を得ることができた。研究成果は以下の四点にまとめられる。

(1) 単著の刊行

当初から博士論文を改稿し、それをアメリカ大学出版局から英語単著として出版することが本研究計画の大きな目的の一つであったが、それはアラバマ大学出版局刊行の *Modernizing Solitude: The Networked Individual in Nineteenth-Century American Literature* (図書 1) に結実した。本書は第五回日本アメリカ文学賞とアメリカ学会第二十五回清水博賞を受賞し、国内の主要学会で高い評価を得た。さらに本書は国内外の主要学術誌で書評され、有益なフィードバックを得ることができた。

(2) 「寂しさ loneliness」に関する研究

孤独という状態に加えて寂しさという感情を考察するのが本研究の目的の一つだったわけだが、この点に関しては主にハーマン・メルヴィル作品を取り上げることで研究を行った。この研究にあたっては近年の情動理論を網羅的にリサーチし、その成果は特に論文 1 にまとめられた。本論文ではメルヴィルの代表的短編「パートルビー」を取り上げ、本作品におけるネガティブな感情が経済的循環と連動したものであることを論証した。さらに学会発表 2 においてはメルヴィルの代表作『白鯨』におけるエイハブ船長の個人主義的な孤独に着目したうえで、個人主義という当時の文化的イデオロギーを背負ってしまったこの人物が、孤独の背後で痛切な寂しさを感じている、という点を論じた。この学会発表は論文 2 として結実し、アメリカの学術誌に掲載されることとなった。さらに、学会発表 3 ではメルヴィルの第 1 作長編『タイピー』を取り上げ、主人公トンモの、部族社会にもキリスト教社会にも帰属意識を持ってない根無し草な個人としてのありようを浮き彫りにし、寂しさという感情と、帰属すべき共同体を求めようとする欲望との相克を明らかにした。本研究発表は論文としてまとめ、現在学術誌に投稿済みであり、査読結果を待っている状態である。

(3) 家族に関する研究

孤独な個人を研究するうえで重要な視点は、その個人を疎外する共同体の存在である。本研究を遂行する過程で浮上した重要なトピックとして、「家族」という小さな単位の共同体が挙げられる。アメリカ文学において、家族というのは小さな共同体をなすと同時に、アメリカ国家という大きな共同体を象徴するメタファーとしても機能する。母国イギリスに反旗を翻し、「親から独立した若き子」として誕生したアメリカにとって、家族は自然と国家像を反映したものとなる。ジェファソン、ワシントンら建国に関わった政治家たちがアメリカ建国の理想を体現し、「建国の父」と称されることも、家族制度の政治化の一例として見ることができる。この問題意識を念頭に、ナサニエル・ホーソーン『七破風の屋敷』に関する論文を執筆し、2021 年に刊行予定の共著へ寄稿した (図書 2)。本小説においては、規範的な社会から疎外された孤独な個人たちが小さな家族を成す過程が描かれるが、本論文はこの作品に描かれる家族が実はアメリカ国家のメタファーとして機能しており、疎外される個人を受け入れる避難所 (asylum) として機能しつつも、同時に人種的他者を疎外してしまっている、という矛盾を指摘した。本研究計画の過程で注目することになった「家族」表象は近年のアメリカ文学研究で注目を集めているテーマであり、今後も取り組むべき課題として認識している。

(4) 時間性 (temporality) に関する研究

孤独に関する研究を進めるなかで、さらに時間という問題系が浮上し、この観点からメルヴィルの短編作品『魔の島々』の読解に取り組んだ。本作品においては、ガラパゴス諸島がヨーロッパ世界から隔絶された島として描かれている。そこで重要なのは、この孤独な島々において、当時欧米社会が経験していた急速な近代化という時間の流れは無効化されており、ガラパゴス島に

表象されているように、この島々では全ての時間が緩慢で時が止まっているように見えるという点である。物理的・地理的な孤独が、時間という問題と連動している点に着目し、国際メルヴイル学会において口頭発表を行った（研究発表 1）。また、この発表に基づいて論文化したのが論文 3 である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yoshiaki Furui	4. 巻 53.2
2. 論文標題 Bartleby's Closed Desk: Reading Melville against Affect	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of American Studies	6. 最初と最後の頁 353 ~ 371
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S0021875817001402	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiaki Furui	4. 巻 62.4
2. 論文標題 Lonely Individualism in Moby-Dick	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Criticism: A Quarterly for Literature and the Arts	6. 最初と最後の頁 599 ~ 623
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.13110/criticism.62.4.0599	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiaki Furui	4. 巻 23.3
2. 論文標題 Against the Assaults of Time: Uncertain Futurity in "The Encantadas"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Leviathan: A Journal of Melville Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.13110/criticism.62.4.0599	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiaki Furui	4. 巻 9.3
2. 論文標題 Introduction: Japanizing C19 American Literary Studies	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 J19: The Journal of Nineteenth-Century Americanists	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yoshiaki Furui
2. 発表標題 The Great Nation of Uncertain Futurity: Non-Human Time in "The Encantadas"
3. 学会等名 12th International Melville Society Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古井義昭
2. 発表標題 ネットワーク小説としての『白鯨』: Lonely Individualismをめぐって
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古井義昭
2. 発表標題 メルヴィル文学における他者の深層: 『タイピー』を中心に
3. 学会等名 九州アメリカ文学会12月例会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Yoshiaki Furui	4. 発行年 2019年
2. 出版社 University of Alabama Press	5. 総ページ数 239
3. 書名 Modernizing Solitude: The Networked Individual in Nineteenth-century American Literature	

1. 著者名 古井義昭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 巽孝之教授退職記念論集（仮）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------